

湘南の西行と西行伝説

紙 宏 行

西行は、生涯に二度、陸奥へ旅に出ている。初度のは、二十代後半で、仏道修行と歌枕探訪の数寄とを兼ねた旅であった。東海道を辿り白河関を越えて、信夫、武隈、名取川を通り、平泉に達した、という経路は『山家集』などからわかる。しかし、相模国を通過したはずなのだが、どの道を通ったのかはわからない。

二度目の旅は、文治二年(一一八九)、六十九歳の老軀を駆って、東大寺再建のための砂金勸進を目的に奥州平泉の藤原秀衡のもとへ出かけたものである。途中、同年八月十五、十六日に、鎌倉に立ち寄り、鶴岡八幡宮社頭において源頼朝に対面する。『吾妻鏡』には、偶然の出会いのように記しているが、西行としては、勸進が障害なく進むように要請したものであろうし、頼朝も、重代の武家出身の西行に先祖伝来の武芸について聞いてみたかったのであろう。両者は、和歌や武芸について親しく歓談したが、退出時に頼朝から賜った銀製の猫を、西行は門前の子どもにも惜しげもなくやってしまったという。

当時、東海道から鎌倉へ出るには、足柄峠を越えて、関本から国

府津へ出て、ほぼ今の東海道線、国道一号线に沿い、辻堂あたりから南東に折れて、鶴沼あたりで引地川、境川を渡り、江ノ島を右に見ながら海岸沿いに鎌倉へ入るといふ道を通った。西行も、文治二年八月月上旬に、確実に湘南の地を通っている。

この二度の陸奥旅を、『西行物語』は、一度のこととして語っている。混同したのではなく、修行の一環として語るべく、あえてひとつにまとめたものであろう。主人公の西行は、突然の出家の後、西山で暮らしその後伊勢にわび住まいをし、さらに三年を過ごした後、二十代の後半に陸奥旅に出かけている。

伊勢を出立し、遠江国天中の渡を越え、小夜の中山、岡部を経、足柄山を越えて相模国に入る。『西行物語』は次のように記す。

相模国大庭といふところ砥上が原を過ぐるに、野原の霧のひまより、風にさそはれ鹿の鳴く声しければ、

えはまよふ葛のしげみに妻籠めて砥上が原に雄鹿鳴くなり
その夕暮がたに、沢辺の鴨飛び立つ音のしければ、

心なき身にもあはれは知られけり鴨立つ沢の秋の夕暮

「大庭」というのは、現在の藤沢市大庭のことであり、「砥上が原」というのは、今の片瀬、鶴沼のあたりかという。『新古今集』に入り、その中で特に「三夕の歌」のひとつとして著名な「心なき」の歌は、現在の藤沢で詠まれたというのである。これが事実とすれば、まことに楽しい限りであるが、しかし、そのような夢想は許されないようである。『山家集』には、「心なき」の歌は「秋、ものへまかりける道にて」の詞書のもとに収載されていて、詠作の場所は特定しえず、したがって、陸奥への旅の途上に詠まれたわけではなくて、『西行物語』の記述は虚構にすぎないとするのが、現在の定説である。

もちろん、問題は、「えはまよふ」と「心なき」の二首の歌が、『西行物語』にいうように、この大庭の地で詠まれたのか否かという、事実性を明らかにすることではない。二首の歌、特に名歌として喧伝されていた「心なき」の歌が詠まれた場所を、この大庭の地に引きつけた理由が、大庭の側にあつたかどうかということである。『西行物語』の成立は、建長以前、西行死後五、六十年後ごろとい^(注3)う。西行の死後遠くない時期に、「大庭」なる、歌枕でもない無名の地が、西行と結びつけられて忽然と物語の中に登場してくる理由を問うてみたいのである。

現在、大庭には大庭城趾公園がある。太田道灌築城の遺跡が公園として整備されたものである。春には桜がまことに美しい。遺構としては室町以前のものは残っていないようであるが、さらにさかのぼって、『平家物語』にも登場する大庭景親の居城の跡であるうと推測されている。この居館を中心とした大庭氏の領地が、いわゆる

大庭御厨^(注4)である。

大庭氏の祖、鎌倉権五郎景正は、この大庭の地を先祖伝の私領として伝えていたが、十二世紀の初め、伊勢神宮に寄進し、大庭御厨が成立した。御厨とは、伊勢神宮の領地のことをいう。景正は、自身の伊勢への信仰もあつたろうが、また伊勢神宮の神威をかりて名目上の領主(本所)とし、自らは御厨司となつて領地の実質的な領有権を確保しようとしたものである。そのうえで大庭という広大な荒野の開墾にのりだしたのである。古く大庭には、『延喜式』のいわゆる式内社として、相模国十三社の一、大庭神社があつた。現在も大庭神社は鎮座しているが、式内社の大庭神社は現在の大庭神社ではなく、辻堂駅寄りの権現神社がそれであるらしいが、定かではない。大庭御厨の範圍は、東は境川、南は海、西は寒川神社の神領に接し、北境は不明だが今の湘南台、長後あたりらしく、本学キャンパスを含み、藤沢・茅ヶ崎両市のほとんどを占める広大な地であつたようである。

景正が領地を伊勢神宮へ寄進するにあたっては、神宮権禰宜師光や伊勢恒吉なるものが介在したらしい。伊勢恒吉とは、伊勢内宮の神官の仮名であろうと推測されているが、『神奈川県史』には「後に伊勢のお札くばりや信徒の組織に活躍した御師たちの先がけとして、この時代からすでに伊勢の神官たちが東国各地を遍歴して歩き、伊勢信仰を流布するとともに御厨の寄進をすすめてまわつていた^(注5)」とする興味深い記述がある。

天養元年(一一三二)、鎌倉の源頼義は、大庭御内の鶴沼郷の領有を主張して郷内に乱入し、数々の乱暴狼藉を働き、あげくのはては御厨内の伊介神社の神主荒木田彦松の頭を打ち割り、神人らに傷を

負わせるという事件が起きた。御厨側は、領有を正当とする宣言を朝廷に要請して宣言を得、何とか危地を脱したのである。伊介神社(注)とは、神宮系の社であり、今の鶴沼(烏森)皇太神宮であるとする説があるが、明確ではない。大庭御厨はこのように常に他からの侵略の危機にさらされていたわけで、神宮に寄進し、また事件後もしばしば同趣旨の宣言を要請し続けた所以である。

景正は後三年の役に負傷をおして大活躍した武将である。領地の伊勢神宮寄進というのは、彼なりの精いっぱいの処世術であつたろう。その子孫の大庭景義、景親兄弟は、源平の争乱時に、それぞれが分かれて源氏と平氏に就くという苦渋の選択を決して、家と所領を守つた。有力豪族に囲まれ、時代の変転と権力の恣意に翻弄される、中小豪族の悲劇というべきだろう。

ここで注意しておくべきことは、大庭御厨には、神宮権禰宜師光や伊勢恒吉らが、確かに足跡を残し、あるいは内宮祠官につらなる荒木田彦松という神主と複数の神人が常駐していたことである。大庭と遠く離れた伊勢神宮とは、祠官級の人物や神人が行き来し、常に関係を保っていたのである。大庭というと、これといった特徴のない一地域も、中央の文化とは決して無縁ではなかったことを示している。

西行は、治承四年(一一八〇)、六十三歳のとき、戦乱の災禍の及ぶのを避け、伊勢に赴き二見の浦に草庵を結んでいる。二度目の陸奥旅行は、この伊勢から旅立ったわけである。西行伊勢在任の間、西行の歌人としての名声を慕い、西行を中心とした歌人グループが形成されていた。その中に、内宮の一禰宜荒木田氏良がいる。某年の二月十五日の釈迦涅槃の日に、曇る月をめぐって歌を贈答して

(注) いる。荒木田氏良は、西行より三十五歳の年少で、西行を慕いつつ、また内宮の筆頭として西行を庇護しながら、親交をかわしていた。氏良は、大庭御厨の名目上の領主であり、前にあげた大庭御厨に關係した伊勢恒吉や荒木田彦松は、この荒木田氏良の祖先あるいは縁者にあたるであろう。

文治二年八月十五日に鎌倉へ着いたとすれば、少なくともその数日前までには、西行は藤沢の大庭御厨の領地内を確実に通つている。その時、荒木田氏良に勧められて大庭御厨の神宮系の社に参詣したかもしれないし、神主の荒木田氏の某に会つたかもしれない。実在の西行と大庭を結びつけるわずかな可能性は、伊勢を媒介とした、このまことにおぼつかない推測だけである。

しかし、前に述べたように、実在の西行の事跡の事実性が問題なのではない。大庭には、伊勢関係の神主や神人などという中央文化と交流のある人たちが出入りしていたことが重要なのであって、「えはまよふ」と「心なき」の二首の歌を、西行がこの大庭の地で詠んだものと付会したのは、かれらであつたのではないかという推測が可能である。あるいは、次節に述べるように、大庭には念仏聖の居住地があつたらしく、西行と大庭とを結んだのは、念仏聖らであつたかもしれない。有名な西行が、特に名歌として誉れ高い「心なき」の歌を詠んだ場所が、この大庭の地であつたことに、伊勢関係者あるいは念仏聖らにとっては大きな意味があつたのである。

『西行物語』の作者群や伝承者には、伊勢周辺のほか、京都双林寺周辺の念仏聖や時衆系の遊行僧などが擬せられていて、諸説並び立っている状況にある。(注) その課題に答える用意は今はないし、右の

ような憶測が伊勢が作者圏であると決する根拠となりうるとも思われない。しかし、「大庭」なる、歌枕でもない無名の地名がことさらに物語に記されているのは、『西行物語』に一部掬い上げられるような、西行伝説の作者圏や伝承圏が、このあたりにあったことを示唆しているように思われるのである。

『撰集抄』は、語り手を西行に仮託し、極限の通世者の説話を集めた仏教説話集である。その中に、「昔、相模の国に大庭といふ野の中に、かたのごとく庵むすびて居れる僧ひとり侍りき」と始まる説話がある。^(註)この僧は、貧しく病む寡婦のため、里に出て銭米を求めて養い、念仏を勧めていた。僧のありさまは「あはれみ深うて」里人の尊崇を集め、往生のときには、音楽が聞こえ紫雲がたなびいたという。

この説話と、実在の西行の陸奥旅行とを結びつけようとする説がある。「さきの大庭念仏聖の説話はこの旅の途中に伝聞したものと推察されるが、在り得べからざることではないと思われる。いま大庭の小名に「聖が谷」「隠れ里」がある。それについて里人の語るところがないが、それだけにその地名の由って来たるところは古る、あるいは、かの念仏僧伝説と関係あるやもはかり難い。」(『藤沢市史』第四巻)というのがそれである。もちろん、これは、『撰集抄』の西行仮託の虚構性を考慮にいれない短絡的な発想で、従えない。ただ、右の記述は、説話の伝承者として念仏聖の集団が大庭に存していたと想像してもよいことを示唆しているように思われるのである。

とすれば、大庭の僧の説話と西行とを結びつけ、『撰集抄』の作

者圏にもたらしたのは、大庭にいた念仏聖の集団であったと推測することが可能になってくる。実のところ、大庭の僧の説話が、だれの手によって西行がこの説話を伝承したこととして仮構され、どのような経路から『撰集抄』に収載されることになったのかはわからない。ただ、その過程には、大庭にあった人たちが関与していた可能性もあることのみを確認しておきたいのである。

実在の西行と大庭との縁は、まことに希薄である。しかし、自らの地に西行の事跡を付会し、西行説話を伝承していた人たちが、大庭には存在した可能性を探ることはできる。かれらは、西行を尊崇しその事跡を慕い、あるいは西行の虚像を利用しようとした。西行や西行伝説を引き寄せようとする磁場が、大庭には存在したのである。

『西行物語』に見えるもうひとつの地名「砥上が原」は、『和名類聚抄』に高座郡十三郷のひとつとして記録されている「土甘郷」あたりの原野らしい。境域は旧藤沢と鶴沼のあたりらしく、平安後期には鶴沼郷が分離したという。いうまでもなく、大庭御厨の領内のひとつの郷村である。西行は、鎌倉に入る前に大庭御厨を通過したのだが、経路としては特にこの砥上が原をよぎったはずである。その地名は、現在では、江の電に「石上」駅があるなど、わずかに痕跡が残っているにすぎない。

物語中で砥上が原において詠んだという「えはまよふ」の歌は、『山家集』ほかの西行の家集には見えない。西行の真作ではなく、『西行物語』形成者、あるいは物語以前の説話伝承者が、作者未詳の歌を西行の詠として語り伝えたものであろう。

西行を尊敬していた、ごく近い時代の人のひとりに、鴨長明がいる。長明は、西行が奥州に旅立ったその年に入れ違いに伊勢に赴いた。西行の跡を慕ってのことであるが、長明はついに西行に会うことはなかったようである。その後、長明は、鎌倉に下向する機会を得、建暦元年（一一二一）、源実朝に対面した。その途路、長明は砥上が原で次のような歌を詠んでいる。

浦近き砥上が原に駒とめて片瀬の川の汐干をぞ待つ

『歌枕名寄』所収で、長明実作とは即断できないが、歌の内容は、鎌倉に入る直前の詠というにふさわしく、大磯の「唐が原」の地の詠もあり、長明の鎌倉への旅についての歌であると認めてもよいであろう。「片瀬の川」とは境川のことである。

「砥上が原」と詠んだ歌は、この歌以前にはなく、長明の歌によって歌枕に認定されたようである。それ以降にいくつかの詠がある。長明は、旅での実体験に基づいて歌を詠んだものであろうが、そこに二十五年前に西行がこの地をよぎったことも想起したことであろう。西行の旅の姿と都遠く同じ地に立つ現在の自分とを重ね合わせ、深い感慨があったことと思われる。

片瀬二丁目の片瀬公民館の前に「西行見返りの松」という遺跡がある。民家の塀に囲まれた一坪にも満たない小さな遺跡であるが、細い松と「西行見返りの松」と刻んだ標柱が残っている。この松について、「西行見返松は、片瀬村へ行く路辺の右にあり。枝葉西方へ指す。西行この所に来て西のかたを見返り、この松の枝を都のかたへねぢたりとなり。故に戻松ともいふ。」（『新編鎌倉志』巻六、「西行見返松」という伝説がある。

柳田国男は、全国各地に残る西行橋、西行戻りの遺跡と伝承について、「戻り」と云ふ語が橋占と縁あり、「昔の人が峠の口又は橋の詰に於て歌占を聞いた風習の痕跡と見て居る」と述べている。片瀬の西行見返りの松は、橋辺にはないが、近くに境川が流れ、鎌倉とその域外の地とを分ける境界の地にあり、片瀬も西行戻りの伝承が生ずるにふさわしい。各地に同趣向の伝承が多くあり、前にあげた中世の西行伝説とは別の経路で生じてきた伝承であろうが、ともかくも、西行のこのような事跡も、この地に伝えられていたのである。

「西行見返りの松」に関してはどうひとつ伝承がある。藤沢が生んだ幕末の碩学、小川泰堂という人物に、「我がすむ里」という親しい名の藤沢の地誌があり、その書に、『今物語』や『井蛙抄』など多くの資料に所載の説話が、この「西行見返りの松」の地におけるできごとであったと記している。その説話とは、『千載集』撰集のころ、東国にいた西行は、「心なき」の歌の採否が気にかかって京へ上って行ったが、途中で知人（『井蛙抄』などではこれを登蓮とす）に会って撰入されていないことを聞き、「さては見て要なし」（『井蛙抄』）と、またもとの東国へ引き返したというものである。謡曲『西行塚』では、その地を近江国醒井としている。小川泰堂が、自身の故郷のできごととして強引に付会したのか、そのような伝承が小川泰堂以前から流布していたのか。いずれにせよ我田引水といふべきであるが、有名歌人西行を自らの故地に引き寄せようとする、西行伝承が各地にわき起こってくる見やすい筋道が見えるように思われる。

文明十八年（一四八六）、大磯を通つた聖護院道興は『廻国雜記』
に、

鴨立つ沢といふ所にいたりぬ、西行法師ここにて、心なき身に
もあはれはしられけりと詠ぜしより、この所をかくは名づける
よし、里人語り侍りければ、

あはれしる人の昔を思ひ出でて鴨立つ沢をなくなくぞとふ
と記している。室町時代の中頃には、「心なき」の名歌は大磯の地
で詠まれたという伝承が里人の間で行われ、「鴨立つ沢」なる地名
も定着していたのである。寛文四年（一六六四）には、小田原の崇
雪が草庵を結び、「鴨立庵」の標柱を建て、以後大淀三千風らの手
によって俳諧道場として興隆するなどしたが、一方で、本居宣長ら
が「鴨立つ沢」とは地名ではないと考証してもいる。もとより信じ
られていないわけだが、それでも、「心なき」の名歌の虚構の詠作
地としては、現在では、大庭よりはるかに有名になっている。

ほかでもないやはり湘南の地に、「心なき」の歌が詠まれた場所
があったという伝承の存在に注目したい。『西行物語』成立の後、
二百年ほどを経て、詠歌の地は大磯に移った。この理由はわからな
いし、なぜ大磯であるかも知りうる資料はない。ただ、大磯は、
『曾我物語』に有名な虎御前のいたところであり、源頼朝も遊楽に
赴くなど、遊女の地として知られている。遊女と聖とは、罪深い遊
女の結縁という意味で結びつきやすく、遊女と聖との交渉を描いた
説話・伝承は数多い。西行と遊女という取り合わせも、『新古今集』
にのる遊女妙と西行の贈答（注15）はじめ、数多く伝えられている。また、
これも憶測にすぎないのだが、「心なき」歌が詠まれた場所を大庭
から大磯に移してきたのは、彼女たちではないだろうかと思うので

ある。

伝承の西行の旅の後ろ姿は、湘南の地、特に藤沢周辺には意外に
多く見え隠れしている。相模国にはほかに、これほど西行関係の伝
承が残っているところはない。西行を尊崇し、敬慕する人たちが、
西行の死後遠からぬ時期からおそらく現在に至るまで、存在し続け
ていたのである。

- (1) 『西行物語』には、絵詞も含め多様な伝本が伝えられており、
本文も異同が甚だしいことは周知のごとくである。依拠すべき
本文も決めたいが、ここでは、活字本として最も入手しやす
い、桑原博士訳注『西行物語』（講談社学術文庫、昭56・4）
に拠った。引用部分には、大きな異同はないが、一首目の歌の
初句「えはまよふ」が「えはまどふ」になっている本もある。
- (2) 『山家集』上巻・秋・四七〇に収める。初度の陸奥行におけ
る詠歌群は下巻・雑にある。
- (3) 坂口博規「西行物語」の成立時期をめぐって——絵巻と物
語の関係を中心に——（駒沢大学文学部研究紀要）34号、昭
51・3。『西行物語』と『古今著聞集』『絵巻』諸本との比較
から、『西行物語』は「建長以前のそれ程遡らぬ頃、大体十三
世紀中頃の成立」であるとすると、成立に関する代表的な説で
ある。

- (4) 大庭御厨に関しては、『藤沢市史』第四巻（昭47・3）に拠
るところが大きい。

- (5) 『神奈川県史』通史編1原始・古代・中世（昭56・9）。

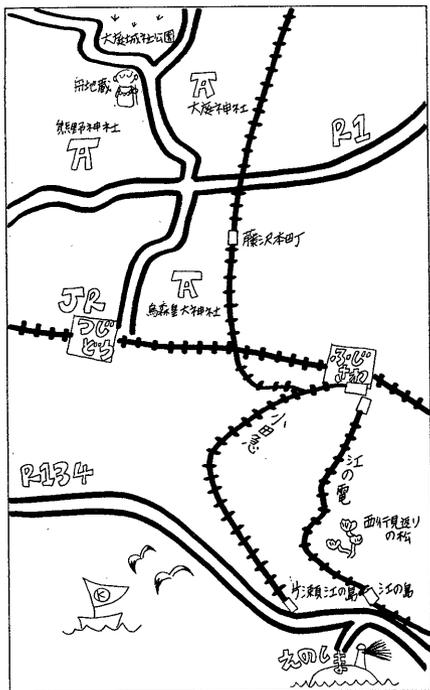
(6) 同右。

(7) 『聞書集』一〇五、六。

(8) 『西行物語』の作者及び形成者として、京都東山双林寺周辺に集う念仏聖たちを想定する論に、坂口博規「『西行物語』考」
〔駒沢国文〕13号、昭51・2)、および、高城功夫「西行物語の典拠——特に宝物集との関係——」〔『東洋』19巻12号、昭57・12)がある。一方、伊勢周辺の人たちを擬するものに、谷口耕一「西行物語の形成」〔『文学』昭53・10)があり、今にわかに決めたがたい。

(9) 『撰集抄』巻七第三「相州大庭野聖事」。西尾光一校注岩波文庫本に拠る。

(10) 『新編相模国風土記稿』第六卷(昭45・11復刊)所収本に拠



〈交通あんない〉

大庭城址公園へは辻堂駅よりバス舟地藏または小糸、大庭小学校下車。公園としてきれいに整備され、管理事務所には大庭周辺の歴史について簡単な展示がある。権現神社には大六天下車、大庭神社には天神社前下車。周辺は気軽なハイキングコースとなっている。また、西行見返りの松には江ノ電江ノ島駅下車、徒歩10分。文学遺跡とはこんなものかという典型、気づかず通りすぎないように。

る。

(11) 柳田国男「西行橋」〔柳田国男全集〕第九巻、昭37・3)。

(12) 文政三年(一八二〇)、筆者十六歳の時の著作。慶応義塾大学三田情報センター蔵。『藤沢市史料集』二(昭51・3、藤沢市史文書館)に翻刻がある。

(13) 「日本歌学大系」第五巻所収本に拠る。

(14) 稲田利徳「西行の名歌説話の生成と展開」〔説話論集〕第三集 和歌・古注釈と説話、平5・5)に詳細な考察がある。

(15) 「群書類従」所収本に拠る。

(16) 『新古今集』巻十・羈旅・九七八、九にある。この贈答は、謡曲「江口」をはじめ、さまざまな伝承を派生している。